生涯学習情報誌
Life Learning

6 2016 Jun. NO.310

生涯学習開発財団

AJCクリエイターズコンテスト2016

財団後援事業

3月25日㈮　東京都美術館にて
主催：AJCクリエイターズコンテスト実行委員会

東京都美術館にて3月23日～27日の間作品展が、同25日に美術館内講堂にて表彰式が行われた。

展覧会場で受賞作品などを鑑賞する松田妙子。

江幡哲也会長（左）らとともに登壇。

財団LLメンバーの株式会社オールアバウトライフワークスが事務局を運営する「AJCクリエイターズコンテスト」は、2007年から開催されており、今回から生涯学習開発財団が後援をしている。9回目となる入選作品展は、3月23日～27日まで東京・上野の東京都美術館にて開催され、会期中の25日㈮に同美術館内講堂にて表彰式が行われた。今回から銀賞が生涯学習開発財団賞となったため、財団理事長・松田妙子も入選作品の鑑賞をした後、表彰式ではプレゼンターとして登壇した。

AJC（Arts Japan Crafts）とは、19世紀にイギリスで活躍したアーチストのウィリアム・モリスが、クリエイターの育成とその職業を確立するために起こした「アーツ＆クラフツ運動」に由来する。日本国内で手芸を楽しむ手芸愛好家は1千万人と言われている。その中には工芸や芸術の領域にまで進化したクリエイターも少なくない。しかし、その活動は個人やグループにとどまり、社会的な認知度を獲得するには至っていなかった。「アーツ＆クラフツ運動」にならい、日本のクラフト作家たちの職業人としての育成と奨励、社会的認知度と芸術度を高めることを目的にコンテストが開催されている。

上位受賞者から「発表の場が励みになる」「思いもよらぬ受賞にびっくり」という声が、大賞のしらすすえみ氏も「ペーパークラフトの楽しさを伝えたい。始めて5年なので驚いている」と受賞の言葉。

その後別会場にて、入賞者らによるギャラリートークとレセプションが行われた。

〈大賞〉内閣総理大臣賞　しらす すえみ氏

〈金賞〉厚生労働大臣奨励賞　川崎 永子氏

〈金賞〉文部科学大臣賞　武 友美氏

〈銀賞〉生涯学習開発財団賞

追立美幸氏
アートジュエリー部門
作品名
「アンランジュ（安蘭樹）の泉」

佐々木芙美子氏
人形部門
作品名
「故郷-人が生れ育った土地、心の源が育まれた所」

Junko.trois氏
アートジュエリー部門
作品名
「あふれる帯」

千年後の人にもメッセージを伝える力がある蒔絵

蒔絵螺鈿棚「秋桜」（2011年）

漆芸（蒔絵）
室瀬和美
Murose Kazumi

1950年　東京に生まれる
1975年　第22回日本伝統工芸展にて「冬華文蒔絵飾箱」が初入選
1976年　東京藝術大学大学院修了（修了制作大学買い上げ）
1985年　第32回日本伝統工芸展にて蒔絵飾箱「麦穂」が奨励賞
1991年　目白漆芸文化財研究所開設
1996年　三嶋大社蔵国宝「梅蒔絵手箱」模造制作（～1998年）
2000年　金刀比羅宮本殿拝殿格天井「桜樹木地蒔絵」制作（～2004年）
　　第47回日本伝統工芸展にて蒔絵螺鈿八稜箱「彩光」が東京都知事賞
2002年　第49回日本伝統工芸展にて蒔絵螺鈿八稜箱「彩華」が奨励賞
2008年　重要無形文化財保持者（人間国宝）認定
　　紫綬褒章受章
2013年　「工芸からKÔGEIへ」展出品（東京国立近代美術館工芸館）
2014年　「人間国宝の現在（いま）」展出品（東京国立博物館平成館）

天台烏薬蒔絵螺鈿平棗（2015年）

黒く艶やかな漆は、それだけでも気品のあるたたずまいを持つ。その表面に金粉や銀粉を蒔いて繊細かつ華やかな文様を描き出す蒔絵は、日本を代表する工芸品として海外でも高く評価されている。蒔絵の第一人者で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている室瀬和美氏の工房を訪ねた。インタビューは2号に分けて、今回は、長く伝えられてきた蒔絵の魅力と、得意とする研出（とぎだし）蒔絵の技術を中心に、次回は、日本の工芸をリードする一人として、漆を通して日本文化の素晴らしさを国内外に広める取り組みなどを紹介する。

――蒔絵の一番の魅力は何でしょうか。

最も古い蒔絵の一つに、弘法大師が、唐から持ち帰った経典を入れるために作らせた箱があります。そこには、大事なものを自分のためにではなく、1000年後

聞き手：上野由美子（右）

古代オリエントガラス研究家。UCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加（1999年～2002年）。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

の人にも大切なものだと伝えたい思いがあり、それが蒔絵の箱になったのです。

さらに、漆は自然の素材を生かし、自然を壊さずに何度でも再生できる素材です。しかしそれは、人間1人の生涯でできる短いサイクルではなく、木地用の樹木を育てるだけで3代も4代もかかる長い循環です。500年前に作られた漆器でも、保存が良ければ、ついこのあいだ塗ったようなきれいな肌合いをしています。木地作りや下地工程があり、一度塗った漆が固まるまで数日、作品が完成するまで数か月から数年かかります。ゆっくり作って、ゆっくり使って、ゆっくりと次世代につなげていく。そこに日本人の美学が凝縮されていると感じます。父親が蒔絵を作る姿を通して、その価値観に共感したのです。息子たちも共鳴していると思います。

――日本独自の技術が生まれたのはいつごろですか。

漆自体は縄文時代まで遡ります。火焔土器は有名ですが、漆も同じくらい歴史があるんです。土器の表面に漆を塗ることで水を漏れなくするという、器文化の発達に大きく寄与しています。もっと遡れば、矢尻を木の柄に固定するために、つるで縛った上から接着剤として漆を塗っていたこともわかっています。木は腐ってしまいますが漆の皮膜は土中では腐らずに残るんです。

蒔絵などの装飾が発達したのは平安時代からと言われています。その後、時代とともに進化し、安土桃山時代にはキリスト教を日本に伝えた宣教師が、蒔絵を注文してヨーロッパに持ち帰りました。西洋には黒塗りに金の模様を施したものなどなかったので、ヨーロッパの王侯貴族たちを魅了したそうです。教会で使う書見台などが当時、大量に輸出されました。実はピアノは元々木目調だったのに、日本の漆の影響で黒になったそうです。

――室瀬さんの研出蒔絵とはどんな技術なんですか。

漆面に漆で絵柄を描いた上から金粉や銀粉を蒔き、いったん全体を漆で塗り込めます。硬化させた後に木炭で研いで、表面を滑らかにしつつ金銀の絵柄を露出させるのです。漆と蒔絵の面が同一面になるため、よほど強く傷つけたりしない限り金銀は剥がれません。

さらに、日本の漆は透明度が高いので、漆に沈んだまの金が透けて見える美しさもあるんです。その特性を生かして、蒔いて塗り込んで研いでを繰り返すと、重ねた漆の厚さの違いから繊細なぼかしや奥行き感を表現できます。研出蒔絵というのは平面のようで、実はミクロンの単位で計算した立体画なんですよ。伝承した技術を今の私の感性で表現するものです。

――金粉を思い通りに蒔くのが難しそうですね。

金粉は粉筒に入れて蒔きます。人差し指と親指で筒をつまんで、もう1本の指でトントントンと一定に弾いて蒔いていきます。粉筒は葦の茎を斜めに切って、切り口に絹を張ったものです。絹は静電気で粉がくっつくのを防ぐために張っています。今はもう取れないので貴重ですが、鶴の羽根の根元を粉筒にした鳥軸も使います。

金粉は金の固まりをヤスリで削って作ります。球体のもの、それを平たくつぶしてキラキラするもの、金の純度による色の違いや、粗さの違いも20段階くらいある。粗さによって粉筒を使い分けます。

――材料や道具を作る人が減っていませんか。

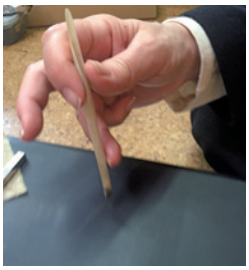
一番困ってるのは研ぎ出しの炭ですね。今は福井の方1人だけです。漆を掻く道具を作る職人さんも青森に1人しかいません。漆自体も国産はわずか2%で、あとは中国等から輸入です。成分分析では同じなんですが使うと違いが出るんですよ。日本の漆は硬くて、透明度が高くて、艶が出る。日本では採り方や採取時期なども、使い方に合わせてこだわってくれているからでしょうね。そうした点も日本の工芸ならではと感じます。

（次号に続く）

漆風呂。湿度を80%くらいに高く保って塗った漆を固める。

本来の漆は透明の飴色。

上半分が炭で研いだ状態。


貴重な鶴の羽根軸の粉筒で金粉を蒔いて見せてくれた。

柔らかい研ぎ出し専用の炭。作れる職人は1人だけ。

蒔絵螺鈿箱「朱光」（2004年）

後悔しない家づくりと、日本の住まい文化向上のために

インテリアアテンダント資格は、住まい手が住宅のプロと円滑なコミュニケーションを図るための共通言語を身につけようという主旨で、２０１３年に始まった。住みたい家の間取り図を描いて、図面から模型を作ってみる。壁紙や家具などもイメージ化し、家具店の回り方なども学ぶ。実際の住まいづくりで失敗しないために、家づくりやリフォームを講座で仮想体験するのだ。

今回ご紹介する名古屋支部の３人は、インテリアコーディネーターや建築士として住まいづくりに関わってきたプロの側だが、資格を取得し、住まい手とのより円滑なコミュニケーションを図ると同時に、それぞれがインテリアアテンダントの講座を開き、地域や従来の仕事との関わりの中で、住まい文化の向上に寄与している。

■この資格を取ろうと思った理由は何ですか？

森本▼消費者の方に住宅づくりを理解してもらえる点に共感し、この資格を広めれたらという思いで取得を決めました。

インテリアアテンダント／名古屋支部長

森本智子さん

2013年11月に資格取得。インテリアコーディネーターとして活動しながら、ライフワークとしてプロダクトデザインも探究。大学の非常勤講師としても両分野の講義を受け持っている

資格のうち、インテリアセルフアテンド２級と１級の講座は、一般の方が住宅という大きな買い物をする際に、初めてで陥り易い失敗をしないように、疑似体験をしながら学びます。家作りを知らない初歩の方にこそ、特別な準備なく受講いただきたい講座です。

講座を開催する講師になるための、インテリアアテンダント認定資格については、子育てや介護で仕事から遠ざかっている建築士やインテリアコーディネーターさんに、社会復帰の第一歩としてもご活用いただけるのではと思います。

大矢▼大学の同級生で同じ大学の講師仲間でもある森本さんから、「目からウロコよ」と勧められました。もちろん仕事にも役立つと感じました。

後藤▼30年余り住宅や店舗のプラン・施工に携わってきて、ユーザーさんとのより早い段階での基本的なコミュニケーションの重要性を感じていたので、ちょうどよい講座だと思い取得しました。

■どのような場面で活かしていますか？

インテリアアテンダント／名古屋副支部長

大矢貴子さん

2014年1月に資格取得。設計事務所勤務を経て独立。一級建築士、整理収納アドバイザー２級の資格も持つ。大学の非常勤講師として手描きパースを担当

森本▼仕事の上では、従来も難しい用語は避けて、できるだけわかりやすく表現することを心がけていましたが、それでも十分ではないことを、講座を開催する度に感じています。わからない方の「どんなことがわからないか？」を知る機会を得られ、初心を維持する上で非常に役立っています。大学時代の同窓生を中心にものづくり集団を作って、展示やワークショップを行っていますが、そうした活動でも活きていると思います。

大矢▼住まい手と作り手、どちらにも役立つ資格です。私も一級建築士としてお客様と話す際は、専門用語をできるだけ使わず、わかりやすい説明を心がけていました。資格取得後はさらに、パースやスケッチを多用し、お互いの思いを空間的に共有できるよう努めています。講座を受講いただいた方からは、「もっと早くこの資格を知っていれば」と言われることが多いです。作り手側のゼネコンや工務店の方にも受講いただいており、「お客様と打ち合わせする際の参考になった」などと言われます。

インテリアアテンダント／名古屋支部所属

後藤一恵さん

2014年5月に資格取得。インテリア事務所オフィスK3代表。カフェ・ギャラリー経営。インテリアコーディネーター、二級建築士、整理収納アドバイザー１級、ガーデニングインストラクター１級

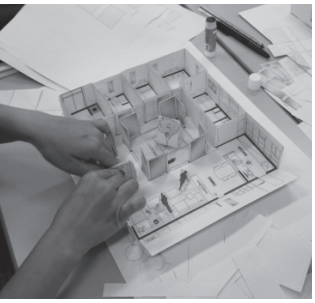
後藤▼私は、自宅オフィスを中心に講座を開き、日本インテリアアテンダント協会のテキストに基づいて進めています。受講生から「役立った」「とても面白く学べた」「自分も資格を取って講師をやりたい」と言われ、自信を持って活動しています。

森本▼同じ志の方々とご一緒する機会に恵まれることも魅力の一つです。インテリアコーディネーターの先駆けである後藤さんもその一人で、以前から顔見知りではありましたが、共に資格普及を目指してさらに活発な交流をさせていただいてます。

後藤▼そうですね。自分のためというよりも、人の役に立つ資格だという点が魅力です。

大矢▼テキストの内容は同じでも、受講される方によって話の拡がりが全く違うのが面白いです。昨年協会が出した書籍『99％失敗しない「理想の家づくり」』を受講者にプレゼントするとすごくよろこばれます。

名古屋支部の3人も企画に関わった『99%失敗しない「理想の家づくり」』と『99%後悔しない 65歳からのリフォーム&家づくり』（どちらも日本文芸社刊）。



講座の特徴の一つである、平面図からの模型作り。

■ 取得後も日々勉強や努力をしている点は？

森本▼住まいづくりは暮らしづくりと相乗の関係ですので、生活全般と結びついているので、勉強という堅苦しい考え方をせず、何にでも好奇心を持って取り組んでいます。

大矢▼住宅関連の新製品情報などはもちろん気にしていますが、現場でいただくお客様からの一言がありがたく、講座で役立つのではないかと常にアンテナを張るようにしています。

後藤▼講座の限られた時間の中で受講者さんに力を付けていただくため、話し方、進め方、心の準備などの大切さをお伝えしていますが、得手不得手は人それぞれなので、臨機応変に対応する力を磨くことでしょうか。カフェ・ギャラリーでも講座を開いていますが、コーヒーブレイクには忌憚のないお話が聞けて、それが大変勉強になっています。楽しく学んでもらえるように、堅苦しくない明るい雰囲気作りを心がけています。

■ さらに社会に役立つために、今後どう取り組んでいきたいですか？

森本▼住まい手の方から「あの会社のスタッフは、インテリアアテンダントを取得しているから安心して相談できる」と言われるよう、住宅関連の専門職以外のスタッフの方々も取得して、共通語を持っていただくことが理想です。そうなるよう少しずつでも広めていきたいと考えています。ただし、押し付けになってはいけないので、あくまでも消費者の選択肢の一つくらいにポピュラーにできたらというのが目下の目標です。そのためには、名古屋支部のネットワークももっと広げる必要がありますね。

大矢▼現在、反抗期真っ只中の子供2人を育てながら、母と一緒に寝たきりの祖母の介護をしていますが、子育ても介護も、家づくりと同じで模範解答はないと考えています。介護や子育てを経験したからこそ気づくこともあり、悩みを抱えてる方の解決のお手伝いができるのではないかと思います。

後藤▼たくさんの方にこの講座を受講していただき、後悔しない住まいづくりに役立てていただくために、もっともっとPRしていきたいです。

■ 資格取得を考えている方へのメッセージや励ましをいただけますか？

森本▼晩ごはんを自炊するかレストランで外食するかを考える際に、ブランド物の服を買うのか、自分でミシンを使って作るのかを決める際に、ご飯の研ぎ方や、まつり縫い程度の基本を知らないと選びようがありません。住まいづくりの様々な選択肢においても同様で、基本を知っておくと安心ですよね。というところからスタートしている資格ですので、一般の人の住まい作りに関する、わからない、知らない、という感覚が講座の中で活きてきます。また、ご自身の住宅に対する嗜好・傾向と向き合う機会にもなりますので、身構えずにご受講いただけたらと思います。

大矢▼専門的な知識がなくてもご安心ください。一緒に住まいづくりを楽しみましょう！　そして、いっしょに日本の住まい文化を育てていきましょう。

後藤▼住宅の新築、リフォームを考えている方は図面の見方、スケール感から学び、図面の書き方、コーディネートまでできるようになります。それは後悔しない住まいづくりに役立ちます。プロの作り手にとって、何も知らなかった住まい手の方が知識や知恵を身に着けてくださることは、とてもうれしいことなのです。そして、すでにプロとして住まいづくりに関わっていらっしゃる方は、講師の資格を取って、住まいづくりに大切なノウハウをお伝えしていきませんか。困った時には仲間や協会が後押ししてくれますよ。

●資格の認定元
一般社団法人 日本インテリアアテンダント協会　〒650-0034 神戸市中央区京町76-2-8F　TEL 078-945-8686　http://www.j-iaa.or.jp